連載「巣づくりの住まい」

建築学科　准教授　石川恒夫

上毛　　平成21年11月4日（水）

住空間は〝第3の皮膚〟

連載「巣づくりの住まい」に先駆け

「身近な環境保護対象」

前橋工科大大学院准教授　石川恒夫さんに聞く

衣食住と言われるように、人間が生きていくために欠かせない住宅。前橋工科大大学院准教授、石川恒夫さん(47)はバウビオロギー（建築生物学）の研究者で、健康や地球環境に配慮した住宅づくりを提唱している。石川さんが研究や実践を紹介する全8回の連載「巣づくりの住まい」（11日付スタート）に先駆けて、住空間のあり方などについて聞いた。

―人間にとって住宅とはどんな存在なのか。

まず食が肉体を形成し、衣が温度を調節し、住が生活を守る。私は住まいを「第三の皮膚」と呼んでおり、「第四」があるとすれば地球そのものだ。住宅は家族という最小の共同体の器だが、第四との境界はあってないようなもの。住宅こそ最も身近な環境保護の対象で、自然を大切にするのと同じように考えるべきだ。

―戦後の住環境の変化をどう見ているか。

ほんの少し前まで建材は木や土、石といった自然素材しかなく、住まいの安全の問題自体がなかった。1970年代に入り、化学合成された材料を使うことで機密性、断熱性が高まり、「魔法瓶」の中に人が住むようになり、結果的に健康を脅かす問題が起きている。現在は省エネルギーの推進もあり、安全性と省エネの両立を模索していく大きな転換期にある。

―県内には明治～昭和初期の養蚕農家が多く残っている。古い建物から学べる点はあるか。

高山社発祥の地（藤岡市）を見学したが、暖かさ、寒さと湿度の関係を（建築主の）高山長五郎は本当によく分かっていた。昔は空気を冷やすことは不可能に近かったので、逆に火で暖めて湿度を飛ばす手段を取った。蚕にとって最適な環境は、人間にも負荷がかからない方法だったのに、われわれは本当に忘れてしまっている。だからといって過去に戻るのではなく、現代で生み出した技術を使いながらわれわれに一番なじむ素材、方法で21世紀の住空間を考えていく必要がある。

―本県は木材をはじめ、さまざまな住宅素材が手に入る環境にある。

もっとその点をアピールすべきだ。鉄骨やコンクリートも魅力的な素材ではあるが、私はどうやったら木造でできるかという発想で考えている。木を使うことで森が救われるし、できれば県内のものを使うのが理想的。現在、高崎市内の幼稚園舎を手掛けているが、ほぼ100％県産材を使っている。常時、一定のグレードの木材を供給できるかという点で、群馬は恵まれている方だと思う。

―県産材の利用を進めていくために、行政にできることはあるか。

住宅建築に対する補助金も有効だが、住宅だけでは限定的な使い方になる。不特定の人が出入りする公共施設に積極的に取り入れ、においや雰囲気を感じた人に「木造っていいな」と思わせる環境づくりも大切ではないか。

―今後、家を建てたいと思っている人は、何を基準に建材などを選んでいくべきか。

住宅には経済性、健康性、エコロジーのトライアングルがある。今までは社会全体が経済性主導で突き進んできたので三角形がいびつになりすぎていた。3者の綱引きがあることを意識し、施工主が自主的な判断で選び取っていくのがいい。住まいを自分のパートナーとして、守り育てていってほしい。

現在建築中の幼稚園舎の模型を前に、「住まいを自分のパートナーと思って大切にしてほしい」と話す石川さん